

D-3 「幼児と絵本」第1報
絵本の与え方について

同志社女大家政 片山登美子

1. 絵本が幼児にとって大切な理由は多いが、幼児の精神発達上知らず知らずの間に与えている影響はかなり大きいと思われる。多くの児童文学者は「幼児には初めから優れたものを与えねばならない。」と力説している。選択眼をもたない幼児に選ぶ事を知らせるのは大人の責任であり、どんな基準で選ぶか親も保育担当者も、常に研究しなければならない。今回は家庭と幼稚園で、保育の立場から絵本がどう与えられ、また親と保育担当者の絵本への考え方の、一部の現状を知る事を目的とした。

2. (1)調査期日 昭和43年6月24日～7月13日 (2)調査対象 大阪・京都府市内143幼稚園(回収率41%)5歳(一部4・6歳)の幼児の親466名(回収率72%) (3)質問紙の調査項目は児童文学研究家諸氏の、著書などを参考に作製した。

3. 幼稚園で絵本を積極的に設定保育中に、また落ちつかせたいなど多くの目的をもって、かなり利用されている。総括的にみて親の絵本への熱意も高く、幼児の精神発達上重大な影響があると53%が認め、2%以外は重大と思わないまでも認めている。初めて与える絵本は、玩具とする親が32%、他は最初の本と考えている。絵本選びを専門的に指導してもらいたい親が多い。専門家の多くの推薦絵本は、普及しているとはいえない。絵本から子供に何を期待するか、親と先生に同じ20項目から選んでもらったが、上位項目は一致していなかった。